

京都市域に所在する 『教育碑』についての総合的考察 (二)

－教育碑が表象する京都の教育特性、教育的風土－

生 田 義 久

〔抄 録〕

本稿では、平成 28・29 年度に実施した京都市域に所在する教育碑についての実地調査の結果を踏まえ、教育碑が全体として表象する京都の教育特性やその基盤をなす教育的風土を明らかにすることを目指した。その結果、一連の碑群が、794 年の平安京建都以来、今日に至るまで先駆的な教育発祥の地としてあった京都の姿、より多くの市民に開かれた教育を希求しその実現に向けて営為を重ねる教育的風土、何より、常に多様な学びの場や人材に溢れ、世界とつながった生涯学習都市としての姿を示すものであることを明らかにすることができた。一方、教育碑については、学校教育や生涯学習の場での活用が十分ではなく、効果的な活用に向け、本稿の成果をもとに、教材やガイドブック等の開発を進めることが今後の課題である。

キーワード：教育碑、京都市、教育発祥の地、開かれた教育、生涯学習都市

1. はじめに

現在の京都市域には、その長い歴史と文化を反映し、多くの有形の歴史的建造物や美術・工芸品だけではなく、過去の事績等を今日に伝える多くの「碑（いしぶみ）」が存在している。とりわけ、教育・文化都市としての都市特性を反映し、教育に関わる碑（以下、「教育碑」と略す。）も数多い。それらの碑は、それぞれの時代背景の下に、特定の目的をもって建立されたものであると同時に、全体の碑群としてとらえる時、京都^[1]の「姿」としての教育特性や教育的風土を浮き彫りにする貴重な存在である。

これらの碑についての研究を進めるにあたって、まず、平成 28・29 年度に、各碑の実地調査を行い、その結果を「京都市域に所在する『教育碑』についての総合的考察（一）」^[2]（以下、「総合的考察（一）」と略す。）としてとりまとめた。本稿においては、それらをふまえ、一連

の教育碑群が表象する京都の教育特性や教育的風土についての考察を進めるとともに、教育碑の今後の効果的な活用の在り方についても考察を行った。

2. 教育碑が表象する京都の姿

前記「総合的考察（一）」及び同論文所収の「京都市域に所在する『教育碑』目録」（以下、「目録」と略す。）をふまえ、考察を進めた結果、以下に掲げる京都の教育特性、教育的風土を浮き彫りにすることができた。

なお、本稿においても、「総合的考察（一）」で示した「教育碑についての定義」^[3]に該当する195基を対象とし、その建立目的に基づく分類を用いているので再掲しておく。[A-1-01]等の番号は「教育碑目録」中の各碑のコード番号を示している。

Table1 「教育碑の建立目的に基づく分類と基数」

（基）

A 群 学習施設・教育機関等関連			133			
A-1 維新前教育施設	A-1 維新前教育施設	「大学寮」	1 基 [A-1-01]	(47)		
		「大学別曹」関連	3 基 [A-1-02 ～ 04]			
		「綜芸種智院」	1 基 [A-1-05]			
		「菅家学問所」関連	2 基 [A-1-06, 07]			
		「私塾」関連	38 基 [A-1-08 ～ 45]			
		「京都学習院」(駒札)	1 基 [A-1-46]			
		「会津藩洋学所」	1 基 [A-1-47]			
	A-2 維新後初等中等教育施設	A-2 維新後初等中等教育施設	「番組小学校」関連	28 基 [A-2-01 ～ 28]	(21)	(53)
			「その他小学校」関連	4 基 [A-2-29 ～ 32]		
			「幼稚園」(単独)関連	3 基 [A-2-33 ～ 35]		
			「中学校・私立学校」関連	5 基 [A-2-36 ～ 40]		
			「盲啞教育」関連	3 基 [A-2-41 ～ 43]		
			「女子教育」関連	4 基 [A-2-44 ～ 47]		
			「高校・実業教育」関連	6 基 [A-2-48 ～ 53]		
A-3 維新後高等教育施設	A-3 維新後高等教育施設	「大学」関連	17 基 [A-3-01 ～ 17]	(20)		
		「第三高等学校」関連	3 基 [A-3-18 ～ 20]			
A-4 天皇行幸関連	A-4 天皇行幸関連	「天皇行幸」関連	11 基 [A-4-01 ～ 11]	(13)		
		「東宮・皇后行啓」関連	2 基 [A-4-12, 13]			
B 群 先駆的な取組や功績・業績の顕彰関連			52			
B-1 新たな取組の発祥等	B-1 新たな取組の発祥等	「教育文化的活動」関連	17 基 [B-1-01 ～ 17]	(23)		
		「スポーツ活動」関連	6 基 [B-1-18 ～ 23]			
	B-2 個人の顕彰等	29 基 [B-2-01 ～ 29]		(29)		
C 群 災害、事件・事故等による殉難学童・教師の慰霊関連			[C-01 ～ 10]		10	
合 計					195	

2-1 教育発祥の地としての「京都」の姿

Table 1 に示す A 群の各碑は、平安京建都以降の教育発祥の地であり、また、近代公教育発祥の地でもあった京都の姿を表象している。

(1) 教育発祥の地としての「平安京」

我が国の学制は、文武天皇（697～707）治下の大宝令（701年）によって、都に大学寮、地方に国学をおくとされたことに始まり、平安京にも官吏養成のための大学寮^[4]が1か所設けられ、加えて、当初大学寮に学ぶ学生のための寄宿舎として各貴族により設立され、後、大学寮の付属機関として公認されていった大学別曹^[5]が複数存在していた。それらを示すのが、A-1 群の「大学寮」址碑 [A-1-01]、大学別曹関連の3基の碑（和気氏の「弘文院」址碑 [A-1-02]、藤原氏の「勸学院」址碑 [A-1-03]、在原氏の「奨学院」址碑 [A-1-04]）である。そのほか、菅原清公（770～842）が創設した文章院聖堂（「文章院聖堂御蹟」碑 [A-1-06]）、菅原道真（845～903）の私邸で学問所の役割も果たした紅殿院（「菅家邸址紅殿院」碑 [A-1-07]）、空海（774～835）が創設した綜芸種智院（「綜芸種智院蹟」碑 [A-1-05]）など多様な私的教育機関も存在していた。これらは、我が国における「公私を含めた」教育発祥の地であり中心地でもあった平安京の姿を示している。なお、文章院は、空海とともに唐へ渡った菅原清公が帰国後、唐の制度に倣って大学寮内に貧学生の寄宿舎として設置したものであり、吉祥院天満宮内に所在する現碑は、文章院そのものではなく、菅家の私的学問所の存在を示すものと考えられる。

(2) 近代公教育発祥の地としての「京都」

京都はまた、近代公教育発祥の地である。A-2 群の各種初等中等教育機関の発祥等に関わる碑、A-3 群の大学の開学等に関わる各碑は、私学教育も含めた近代公教育発祥の地としての京都の姿を示している。

① 番組小学校の創設・変遷に関わる碑

A-2 群の碑の中で最も多くを占めるのが、我が国初の学区制小学校である 64 校の番組小学校の創設とその後の変遷に関わる碑群である。「日本最初小学校柳池校碑」[A-2-13] は、1869（明治 2）年 5 月 21 日に我が国初の小学校として、「上京第二十七番組小学校^[6]」が、現在の京都市立京都御池中学校の地に開校したことを示している。その後、順次市内で開校が相次ぎ、同年 12 月中には、合計 64 校が開校した。「わが国最初の小学校」については、諸説^[7]があるが、番組小学校の創設・変遷に関わる一連の碑群は、京都が我が国の「近代学校教育制度」の発祥の地であることを物語っている。なお、「修徳小学校碑」[A-2-22] は、前身の「下京第十四番組小学校」の開校式が柳池校と同期日に行われ、日本最初小学校の一であることを示して

いる。

京都の先人は、明治維新により 1000 年にわたる都の地位を失い、かつてない危機に直面した京都の復興を図るため、先ず人づくり、すなわち家庭の経済条件の如何に関わらず誰でも無償で通うことができる学校創設に着手した。幕末から明治初年にかけて町奉行所等に学校創設の建議文を提出した後述の西谷淇水（良圃、1824～91）らの運動を背景として、1868（明治元）年 11 月、京都府から、当時の自治組織であった 66 の番組^[8]に対し、各番組ごとに一つの小学校建設を呼びかける口論^[9]が発せられた。校舎建設費や人件費等運営費は基本的に各番組の負担とされた中、一部の富商が私財を投じたり、子供の有無や借家・家持にかかわらず各戸が平等に資金を拠出する「竈別出金（竈金）」^[10]を行うことにより、急速に学校建設が進展していった。規模の小さい二つの番組が協同で学校設置した例が 2 か所あり、結果 64 校の番組小学校が誕生した。維新直後のまだまだ混乱した中であって、自分たちの拠金によって学校創設に取り組んだ精神は「竈金の精神」と呼ばれ、「地域の子どもを地域で育てる」気風となって京都のまちに息づいている。

また、番組小学校には、創設の当初から、住民の利便を図るため、子供たちの教場だけでなく、現在の区役所、警察、消防等の機能を果たす施設が併設され、「地域のコミュニティ・センター」^[11]としての役割を果たしたことから、竈金制度とあいまって学校と地域住民の関係はより密接なものとなっていった。京都の学校創設は、淇水らの熱心な活動と、それに応えた後の京都府知事榎村正直（1834～96）ら心ある官吏、学校創設に自ら汗をかけた住民の三者の力が一つになって実現したものであった。「明治政府は、番組小学校の創設とその後の様子を鑑みつつ全国に小学校設置を進めていった」^[12]とされ、京都で実施された学区制小学校はのちの学制における学区制のモデルになったともいわれる。

こうして開校した 64 校の番組小学校や後に京都市に編入されることとなる郡中小学校^[13]は、以降変遷を重ね、戦後、新制中学校に転用されたり、急激な児童生徒数の減少に伴う大都市部では例のない大規模な学校統合の進展^[14]により、多くが閉校に至った。しかし、自分たちの手で創り上げた学校を断腸の思いで統合した以上、新しい統合校を素晴らしい学校にしようと、保護者・地域・教職員・子供たち一体となった学校づくりが進展した。そして、統合跡地について、全市的視野に立った活用も進み、市民サービスの向上や市民の生涯学習、文化活動の充実に資する特色ある施設が建設され、京都市のまちづくりに大きく貢献している。こうした番組小学校の開閉校や跡地活用による新施設に関わる碑が合計 31 基（幼稚園を含む）建立されている（table 1）。

これらの碑の一つ一つが、地域・保護者の教育に懸ける熱意、学校を愛しさらなる発展を願う心を伝えるとともに、その内の 12 基 [A-2-04, 05, 09～13, 16～18, 22, 35] が、地元自治会や同窓会、卒業生等によって建立されていることは、学校創設に当たって自ら資金を出し合った京都の先人の教育に懸ける熱意が今日にまで受け継がれ、学校を閉じる際にも発揮さ

れていることを端的に示している。

こうした学校と地域の関係を示す好例が、初音自治連合会・京都市教育委員会建立の「翔びたう初音記念碑」[A-2-12]である。「『翔びたう初音』とは、京都市立初音中学校^[15]が1993（平成5）年3月に閉校した際の記念事業の表題である。124年の歴史に幕を閉じるのは断腸の思いであったが、この機を新たな出発と捉え、比翼を伸ばす発展を記念した言葉である。」との碑文には、新たな学校と学区を比翼として発展を願う心が込められ、今日的課題である「地域とともにある学校」、「学校とともにある地域」の姿が象徴的に示されている。これら番組小学校以外に明治期に設立された小学校の旧所在地等に関わる碑が4基[A-2-29～32]建立されているが、それらは単に学校の旧地を示すだけではなく、その地に開校されたそれぞれの学校に対する保護者・地域の愛惜の念の深さを物語っている。

② 各種の初等中等教育施設の創設、発祥に関わる碑

A-2群には、番組小学校に関わる碑だけではなく、各種の初等中等教育施設の創設等に関わる碑が合計21基存在している。中でも、1872（明治5）年に開設され、後の高等女学校の揺籃といわれる「新英女学校及女紅場」跡を示す「女紅場^[16]址」碑[A-2-45]、1873（明治6）年に古河太四郎^[17]（1845～1905）が元待賢小学校内に開いた瘡唾教場跡を示す「日本盲啞教育発祥之地」碑[A-2-42]、移転後の我が国初の「京都盲啞院」跡を示す「日本最初盲啞院開学地」碑[A-2-43]、京都府所管による初の公立盲啞院跡を示す「日本最初盲啞院創建之地」碑[A-2-44]、1875（明治8）年に日本で初の幼稚園（「幼稚遊嬉場^[18]」）として開設され、その後1年半で途絶したもの、1929（昭和4）年5月に再度柳池幼稚園として開園した柳池幼稚園の跡を示す「柳池幼稚園記念碑」[A-2-33]などは、様々な分野で我が国の教育の先端を切り開いた近代公教育発祥の地としての京都の姿を表象している。これらの学校は、また、番組小学校と同様に、地域住民が主体となって資金を出し合い協力して創設し、その後、京都府、京都市に移管されていった。

また、「京都慶應義塾跡」碑[A-2-39]、「同志社英学校 第二寮跡」碑[A-2-40]、A-3群中の私立学校の創始に関わる各碑は、京都が近代私学教育の発祥の地でもあることを示している。京都慶應義塾は、福澤諭吉（1835～1901）が慶應義塾の分校として、1874（明治7）年、京都府横村正直（1834～96）参事の支援を得て京都府中学の施設の一部を借りて開校したものであり、その形態は英語や算術を教える私塾的なものであった。半年後には廃校の止むなきに至ったが、諭吉の教育に懸ける熱意を物語っている。現在も、建立者である「京都慶應倶楽部」の手によって碑の管理が続けられている。諭吉は、1872（明治5）年、当時の京都の番組小学校や女紅場、中学校等をつぶさに視察し、「京都學校記」^[19]を著しているが、その中で、「この学校を見て感ぜざる者は 報国の心なき人と言うべきなり」とまで述べており、その感動の様がうかがえる。

さらに、直接、学校の創設等を示すものではないが、A4群の「天皇行幸関連碑」の中にも公教育の発祥に関わる碑が存在する。明治天皇（1852～1912）は、維新以降、六大巡幸^[20]と呼ばれる全国的な巡幸を実施され、その視察地や休憩地を示す碑が全国に残されている。第1回・第3回・第4回巡幸における京都視察とともに、明治10年には、小学校3校での学業展覧、親王を3校に派遣しての学業代覧など、積極的な視察が行われた。市内では、東宮殿下行啓、皇后陛下行啓も含め、教育に関する行幸関連碑を13基確認できる。

「明治天皇行幸地京都府中学址」碑[A-4-03]は、1870（明治3）年12月7日に京都初の中等（高等）教育機関として創設されていた京都府中学を、学制発布2か月前の1872（明治5）年6月3日に視察されたことを示している。その他の12基は、1872（明治5）年から1924（大正13）年までの間に、明治天皇により6小学校（元貞教小、元修徳小、元初音小、元尚徳小、現伏見板橋小・明親小）、京都府尋常中学校、本願寺旧大教校（現龍谷大学）の視察が実施されるとともに、当時の東宮殿下（大正天皇 1879～1926）による京都市立高等女学校、貞明皇后（1884～1951）による同志社女学校の視察が行われたことを示している。

視察地となった各学校においては、いずれも全国を牽引する先進的な教育実践が行われており、1877（明治10）年6月28日に行われた行幸では、当時の上京区内、下京区内の児童を、それぞれ上京第二十九組（初音）小学校、下京第二十四組（尚徳）小学校に集め、学業展覧が行われたことが碑文に記されている。行幸関連碑13基の内の6基は、巡行実施から時を経た1938（昭和13）年から1941（昭和16）年にかけて、京都府により集中的に建立されている。当時の我が国は、戦時体制が強化されつつあった時期であり、行幸関連碑建立の背景には天皇制下での皇威発揚の意図があったことが推察される。

これら一連の教育碑は、中学校教育、女子教育、障害児教育、幼児教育、私学教育など幅広い分野で、地域住民、保護者、市民、行政、さらには論吉のような幅広い人々が一体となって、京都から全国の先駆けとなる学校創設や教育実践が展開されていったことを示している。

③ 大学等高等教育機関の発祥等に関わる碑

京都は、また、市内に39校の国・公・私立大学（短大を含む）が所在する大学・学生のまちである。近代学校教育制度の下で、明治以降今日まで、京都では設置者の如何を問わず多彩な特色ある大学が創設されてきたが、その源流は後述の皆川淇園（1734～1807）の「弘道館」、さらには「大学寮」「大学別曹」にまで遡ることができる。大学の草創や建学の精神に関わるA3群の各碑は、大学発祥の地としての京都の姿を過去に遡って可視化するものである。

A3群の碑の中で、第三高等学校関連の3基[A-3-18～20]、「京都工芸大学繊維学部発祥之地」碑[A-3-07]、「療病院」関連の3基[A-3-02～04]、「佛教大学建学之地」碑[A-3-01]、同志社大学関連の2基[A-3-05～06]、立命館大学関連の5基[A-3-08～12]、大谷大学「知進守退」碑

[A-3-13]、龍谷大学「明治天皇御小休所本願寺旧大教校」碑 [A-4-09] は、明治初期以降、国・公・私立等設置者の如何を問わず、多彩な大学等高等教育機関がそれぞれの建学の精神の下、いち早く京都に設立され、発展の道を辿ってきたことを示している。

また、A-3 群の 20 基中、15 基（75%）は戦後に建立されており、戦前に建立されたのは、5 基（「療病院址」碑 [A-3-04]、「志波無（師範）桜碑」[A-3-14]、「第三高等中学校予科解散碑」[A-3-19]、大谷大学「知進守退碑」[A-3-13]、同志社大学「良心碑」[A-3-05]）のみである。戦後の新学制の下で、新たに設立された大学が少なくないことは当然として、1960 年代末以降の大学紛争の時期を経て大学としてのアイデンティティを確立し教職員・学生等の間で広く共有していこうとする設置者の意図が背景にあったことも考えられる。

大学関連の碑の中には、また、小中学校等と同様に、市民の熱い願いと協力のもと設立されたことを示す碑が存在している。3 基の「療病院」関連碑は、現京都府立医科大学及び付属病院の前身である最初の仮療病院（木屋町二条）、移転後の仮療病院（青蓮院内）、本院（荒神口）の位置・沿革等を示すものであるが、開設に当たっての資金拠出には、寺院を中心に、市中の医師や薬屋のほか、花街の芸妓も協力したと伝わる。京都府立医科大学百年史には、「療病院は財政的には府民によって建設され府民によって運営される存在であった。現代風の表現を用いればむしろ京都府民病院と呼ぶべきでなかろうか。」^[21]とまで記されている。また、「第三高等中学校予科解散碑」は、当初、大阪に設けられた第三高等中学校が、1889（明治 22）年 9 月に京都市に移転後、高等学校令により第三高等学校に改組され従来の予科が廃止されたため、他校へ転籍することとなった学生・教職員が 1894（明治 27）年 7 月に「分袂式」を行い、予科の存在を記念する碑として建立されたものである。

第三高等中学校の移転について、京都大学教養部教授であった上横手雅敬（1931～）は、「三高（*高等中学校の意）の京都移転に当たり、京都府は新築費十六万二千五百円の内、十万円創立費として計上した。市民の関心も強く、京都新校の開業に当たり、三、四万人に及ぶ市民が校内を観覧したといわれ、三高の移転がいかに地元で歓迎されたかがわかる。三高、京大をはじめ、教授や学生と一般市民の親密感という、京都の美風もこのような条件の中で生まれたのである。」と記している^[22]。建碑の背景に、このように市民に愛された京都の地を離れざるを得なくなったことへの学生・教職員の無念の思い、愛惜の念があったことは想像に難くない。

これらの碑は、大学等高等教育機関の創設に際しても、初等中等教育機関の創設と同じように、市民の教育に懸ける熱意の下、市民・教育関係者・行政等が一体となって取り組む京都力が発揮されたことを示している。

2-2 「開かれた教育」を希求し、営為を重ねる教育的風土

A-1 群、A-2 群の碑はまた、京都が単に公教育発祥の地としてのみあるのではなく、教育を

一部の特定の人々に限るのではなく、多くの人々に門戸を広げることを希求し、その実現に向けて果敢に挑戦してきた営為が積み重ねられてきた教育的風土を示している。

（1）空海、皆川淇園、西谷淇水にみる開かれた教育の希求

その典型を前述の「綜芸種智院蹟」碑、「皆川淇園弘道館址」碑 [A-1-17]、西谷淇水「菁々塾跡」碑 [A-1-33] から読み取ることができる。

「綜芸種智院蹟」碑に付置されている駒札には、空海が、当時の大学・国学への入学については厳格な身分制限があり、一般民衆が学問を志すことは非常に困難であったことを嘆き、多くの人々に門戸を開くことを願い、828（天長5）年、綜芸種智院を創設した旨が記されている。「綜芸種智院式并序」^[23]には、空海が遣唐使として派遣された長安では、坊ごとに幼い子供を指導する施設が調い、また県ごとに郷学が開かれていたが、平安京には一大学があるのみで、幼い者の学ぶ施設が一つもないことを嘆き、広く人材を育成するために、身分や貧富に関係なく、学問を好む者にはその機会を均等に与えたいとの願いをもって教育の理想を追求していたことが記されている。同院は、残念ながら空海の死後途絶したが、現在の種智院大学の web サイトには、同大学が同院を起源とする学校であることが掲げられている^[24]。なお、同院の旧地は現碑の所在地ではなく、京都市立九条弘道小学校付近であったと考えられている。

その後、江戸時代中期には、儒者皆川淇園（1735～1807）が、貧窮にある学生が途中で廃学することのないよう宿舍や図書を備えた建物を建設するため、土地を提供するよう当時の奉行所に趣意書「於二京都 学文所取立申度趣意書」^[25]を提出している。趣意書が採択されることはなかったが、諸侯の援助を得て、1806（文久3）年に、「皆川淇園弘道館址」碑が示す「弘道館」が落成した。弘道館は、学問所というほどの意味で江戸時代各地に設けられたが、淇園の弘道館には全国から門人が集まりその数三千人と言われ、私立大学の先駆とされている^[26]。現在、弘道館の旧地に有斐閣弘道館が設立され、財団法人の下に、教育活動が展開され淇園の心を今に伝えている。

さらに、幕末には、私塾「菁々塾」や寺子屋「篤志軒」の塾主であった前述の西谷淇水が仲間らとともに、1867（慶應3）年5月に、教導（学）所設置の建議文を当時の京都町奉行所に提出し、さらに、町組再編のさなかである翌年8月には口上書を誕生したばかりの京都府に提出している。淇水は建議文の中で、貧富の差にかかわらず全ての子供たちが無償で通うことのできる「制度としての学校」建設を訴え、授業料は無償とし、雨・雪に備え傘や合羽まで備えるべきとまで述べている^[27]。また、口上書では、市中に「小学校」を10～12校設置し、1校当たり1000～1200人を学ばせることまで提言している^[28]。

それらの提言は、幕府によって取り上げられることはなかったが、明治維新後、番組小学校の開校として結実することとなった。なお、「菁々塾跡」碑に付置されている駒札には、菁々

塾が、1869(明治2)年6月開校の下京第四番組小学校(後の日彰小学校)の母体となった旨記されている。洪水はその後、元日彰小学校、元明倫小学校につとめた後、改めて菁々塾を開塾しており、教育に寄せる並々な情熱を感じさせる。

(2) 私塾が形成した「開かれた学び」の気風

前述の「弘道館跡」碑、「菁々塾跡」碑も含め、A-1群の碑中、江戸時代前期以降、幕末・明治初期までの間の様々な私塾関連碑が、合計38基(80.9%)存在している。それらの碑は、藤原惺窩を祖とする京学派、木下順庵(1621～98)を祖とする木門派、山崎闇斎(1618～82)を祖とする崎門派(南学派)、石田梅岩(1685～1744)を祖とする心学、国学・陽明学、さらには庶民教育の場である寺子屋・教諭所・孝学堂、蘭学・洋学・医学・本草学等様々な分野において時代の先端を切り拓く碩学が活躍し、その私塾や私邸には全国各地から多くの門人が集い、洛中に「開かれた学び」の気風が満ち溢れていた様子をしのばせる。衣笠安喜の「京都府の教育史」には、当時の住所判明分に限っても、近世京都の私塾として、213か所が掲げられている^[29]。

京都では、漢学(朱子学)の分野でも早くから独自の学問が盛んで、京学派等の儒者を多く輩出し、全国に大きな影響を与えていた。中でも、京出身の町人学者・伊藤仁斎(1627～1705)は、朱子学を否定し、孔子・孟子の思想をその書籍から直接学ぶ「古学」を創始し、「古義堂」(「伊藤仁斎宅古義堂址」碑[A-1-14])を開いたが、その学問は、「庶民を対象にした、庶民による、庶民のための学問」であった^[30]。古義堂は、堀川学校とも呼ばれ、堀川学派の拠点となっていった。また、仁斎と同様、京出身の町人学者・石田梅岩が生み出し、後、門弟による心学講舎の普及活動によって全国に広まった石門心学は、上流貴族や武士の子弟等限られた者を対象とするのではなく、商人道を核に庶民を対象に、その年齢や性別による日常的な生き方の実践指針を具体的に説いた実践道徳であり^[31]、町人哲学とも言われる。これら石門心学の学びの場を表象するのが、石田梅岩の「講舎跡」碑[A-1-21]、「邸址」碑[A-1-22]、手島堵庵(1718～86)が開いた心学講舎「五楽舎址」^[32]碑[A-1-23]、「脩正舎址」碑[A-1-24]である。心学講舎は、最盛期全国で180か所以上を数え、堵庵は、梅岩の思想を体系的にまとめ、全国の心学講舎の講師を家元制度的な方法で統制していたとされる。上田正昭(1927～2016)は、「石田梅岩の思想と行動が明治初期の教育京都の一つの原動力を形作った」とまで述べている^[33]。

最初期の私塾である松永昌三(尺伍)の講習堂(「講習堂址」碑[A-1-10])や古義堂のように、1842(天保13)年に京都の私塾の代表として幕府から表彰され、明治時代にいたるまで二百数十年もの間、子孫・門弟によって代々受け継がれたものもあった。

庶民に開かれた学びの場の一つに寺子屋(手蹟指南所)、教諭所がある。私塾とは異なり、比較的、低年齢の子供たち、商家の使用人や行儀見習いの奉公人などを対象とし、「読み、書

き、算盤」を主に、手習い、行儀・作法など日常生活に関わる実用的な内容が重んじられていた。特に、京都では、それらの場で手習いを身につけることが庶民のたしなみとされ、京都独自の生活の中に息づく学びの気風、文化的土壌が形成されていくこととなった。本稿では、寺子屋に関わる碑は確認できなかったが、「教諭所（宣教館）跡」駒札 [A-1-34] は、1833（天保4）年、皆川淇園門人の北小路梅莊（1763～1844）により、京都教諭所が開設されたことを示している。教諭所は寺子屋と同様、江戸時代、全国に設けられていたが、京都教諭所は半官半民の運営による町民のための生涯学習施設であった^[34]。また、菅原友山（1791～没年不明）が天保初年頃に水火天満宮内に開いた孝学堂（「孝学堂址」碑 [A-1-25]）は、庶民に孝行・孝道を教え、京都における孝道実践の一大拠点として一時は石門心学にも勝る活動が展開されたといわれる。

これらの私塾・私邸等は、幅広い分野にわたって次代を切り拓く人材育成に大きな役割を果たすとともに、手島堵庵の明倫舎^[35]や前述の菁々塾など、番組小学校の母体となったものも少なくなかった。私塾関連碑の多くが、1915（大正4）年から1917（大正6）年にかけて、市教育会によって建立されていることは、私塾等が明治維新後の我が国を担う人材育成に果たした役割の大きさについて、その当時、既に社会的評価が定まっていたことを物語っている。

（3）私塾関連碑の地理的分布が示すもの ～闊達で重層的な学びの環境～

私塾関連碑の地理的分布についてみると、江戸時代中期から後期にかけて、現在の京都市中心部の極めて狭いエリア内に、集中して存在していることが特徴的である。上京区の堀川通りを挟んで相対していた前述の伊藤仁斎の古義堂や山崎闇斎の闇斎塾（「山崎闇斎邸址」碑 [A-1-13]）をはじめ、中京区中心部の狭いエリア内には、石田梅岩の講舎、手島堵庵の五楽舎・脩正舎（後移転）等が軒を連ねていた。また、堀川学派を創始した伊藤仁斎は、毎回、参加者から会長を選び、講義・質問・討論という民主的なゼミナールを実施した^[36]といわれる。

こうした地理的・文化的環境の中で、私塾に集う門人間の相互交流が深まることは必至であり、市民の日常生活に近い所で、闊達な学びの環境が形成されていくこととなった。

また、教育碑の中で建立時期が最古で、鞍馬二ノ瀬の地に建立されている前述の「奉先堂」碑には村人の手により雨除けの屋根まで架けられており、羅山に対する畏敬の念やその功績を後世に伝えたいという熱い思いが表れている。洛中からは距離をおいた洛北の地に、「奉先堂」碑、「藤原惺窩市原山莊跡」碑 [A-1-08]、石川丈山（1583～1672）が一乗寺に結んだ庵跡「石川丈山翁旧蹟」碑 [A-1-11]（現詩仙堂内）、梅田雲濱（1815～59）の一乗寺葉山観音内の寓居跡「梅田雲濱先生旧蹟」[A-1-18] 碑などが残されていること自体が、京都文化の持つ奥深さ、重層性を物語っている。これら一連の私塾関連碑は、江戸時代の幅広い学問分野にわたる私塾や庶民教育機関としての寺子屋・教諭所・孝学堂などの、闊達で重層的な学びの環境が、明治期から今日に至るまでの京都の教育の基盤を形づくったことを物語っている。

2-3 進取の精神にあふれ先駆的、創造的な取組を生み出す「京都」の姿

前記 2-1 の教育発祥に関わる各碑、教育に関する幅広い分野で創造的・先駆的な取組を生み発祥の地となった京都の姿を示す B-1 群の各碑、そうした取組の先頭に立ち時代を切り拓いた先人の業績等を顕彰する B-2 群の各碑は、長い歴史と伝統の下で、進取の精神にあふれ、先進的・革新的な取組を生み出す営みが世代から世代に引き継がれ、新しい文化を創造してきた都市・京都の姿を示している。

(1) 教育における先駆的取組、「発祥」に関わる碑

B-1 群の碑の中で、文化・スポーツ的活動も含めた教育に関わる様々な分野において、先駆的な取組を生み、京都がその発祥の地となったことを示す碑は、23 基を数える (Table 2)。これらの碑は、常に、目の前の子供たち、社会、生活のあり様を見つめ、その課題解決のみならず、未来をみすえ、更なる充実・発展のための方途を考え、その実現に挑戦し続けた歴史を物語っている。中でも、「奨学碑 [B-1-12]」は、学制発布後、教育の普及にひときわの困難があった京北の地で、北桑田郡長・西原光太郎をはじめ郡内外の有志 158 名もの多くの人々が資金を出し合い、教師の養成など人材育成に力を尽くしたことを示すものであり、こうした教育に懸ける人々の熱意が全国の津々浦々に満ち溢れていたことをうかがわせる。

Table 2 「各分野における先駆的取組・発祥に関わる教育碑一覧」

教育・文化関連	【いけばな発祥の地碑 [B-1-01]】 六角堂頂法寺の花道の発祥・発展を記念。生け花（華道）は、今日、学校教育において伝統教育として重要な役割を果たしている。
	【千利休居士遺蹟不審庵碑 [B-1-02], 千利休千宗守居士遺蹟今日庵碑 [B-1-03], 千宗旦居士遺蹟官休庵碑 [B-1-04]】 三千家ゆかりの茶道の発祥の地を記念。京都市立学校では茶道を通した伝統教育推進のため、教育研究会として学校茶道研究会が設立されている。
	【山脇東洋親蔵之地碑 [B-1-05], 日本近代医学発祥地碑 [B-1-06]】 山脇東洋（1705～82）が日本で最初の解剖を行った「六角牢獄」跡を示し、日本近代医学のあけぼのを記念。
	【舎密局跡（駒札）[B-1-07]】 京都府が理化学・工業技術の研究・普及等を目的に 1870（明治 3）年に設けた舎密局跡を示す。京都の近代産業発展に大きな役割を果たした。
	【島津製作所創業之地碑 [B-1-08], 創業記念「源遠流長」碑 [B-1-09]】 初代島津源蔵（1839～94）が創立し、教育用理化学器の開発・製作等を行った島津製作所の創業を記念。
	【ボーイスカウト発祥の地碑 [B-1-10]】 1915（大正 4）年、ボーイスカウト活動の前身「京都青少年義勇軍」の結団式が挙行され、京都連盟創立の起点となったことを記念。
	【同和教育の源流碑 [B-1-11]】 第 11 代伊藤茂光校長らが礎を築いた「人間の尊厳と自由平等」を原点とする元崇仁小学校の教育を記念。

教育・文化関連	【奨学碑 [B-1-12]】 1918（大正 7）年、第 5 代北桑田郡長・西原光太郎の尽力により、郡内外の有志 158 名からの拠金を得て奨学金制度が発足したことを記念。京北町に建立。
	【全国水平社創立の地碑 [B-1-13]】 1922（大正 11）年、岡崎公会堂で、全国から三千名が結集し開かれた全国水平社創立大会の開催を記念。
	【栄養給食の先駆けの地碑 [B-1-14]】 1936（昭和 11）年、成徳尋常小学校で、全国に先駆け「栄養給食」と名付けられた学校給食が実施されたことを記念。
	【BBS 運動発祥の地碑 [B-1-15]】 1947（昭和 22）年 2 月、一学生の提案をきっかけに非行少年の立ち直りを支援する青年のボランティア運動が発会したことを記念。
	【科学者精神碑 [B-1-16]】 1969（昭和 44）年、学習施設・教員研修・展示施設を備えた全国初の施設として創設された京都市青少年科学センターの基本理念・科学者精神を示す。
	【京都こども市会宣言碑 [B-1-17]】 京都市自治百周年に開催された「京都こども市会」で 1998（平成 10）年 8 月 26 日に市内 72 名の小中学生により宣言が議決されたことを記念。
スポーツ関連	【第一蹴の地碑 [B-1-18]】 1910（明治 43）年、関西最初の第三高等学校ラグビー部の創部と三高・慶應義塾による我が国最初の試合開催を記念。
	【高専柔道之碑 [B-1-19]】 1914（大正 3）年から 27 年間にわたり実施された高等専門学校柔道大会を記念。立ち技の講道館に対し寝技が重視された。
	【バスケットボール発祥の地碑 [B-1-20]】 京都第一中学校の佐藤金一教諭が 1915（大正 4）年に京都 YMCA で初めてチームを作ったことを記念。
	【軟式野球発祥の地碑 [B-1-21]】 1919（大正 8）年、京都市第二高等小学校（元成徳小学校）グラウンドでの最初の軟式野球大会開催を記念。
	【卓球バレー競技発展の地碑 [B-1-22]】 京都市立鳴滝総合支援学校が 1974（昭和 49）年誕生の卓球バレー競技の発展の地であることを記念。
	【「都大路の風になれ」碑（京都市小学生大文字駅伝大会開催記念）[B-1-23]】 1987（昭和 62）年、わが国で初めて小学生が公道を走る駅伝大会が開催されたことを記念。

（2）先人の先駆的・創造的实践を顕彰する碑

前記（1）の教育に関わる様々な分野での先駆的取組を生み出す原動力となったのは、何よりも、一人一人の個人の力である。B-2 群の各碑は、教育に関わる様々な分野で顕著な業績を挙げた人物などを顕彰するものである。そうした個人の業績の顕彰こそ碑が有する「伝播機能^[37]」の典型とも言えるが、教育碑の中で個人の顕彰に関わる碑は合計 29 基（14,8%）であり、施設関連の碑（合計 133 基）に比較すると少なくなっている。

それらの内、明治以降の公教育に関わる教育者を顕彰する碑が、16基（学校教育関係7基、大学関係4基、生涯学習関係2基、外国人3基）あり（Table 3）、中でも、初等中等教育関係の「中路亭表彰碑」[B-2-16]、「矢部文載紀恩碑」[B-2-18]、「益井茂平翁顕彰碑」[B-2-19]、真下飛泉「戦友」碑[B-2-25]、「上田静一先生之碑」[B-2-27]、「米田貞一郎先生碑」[B-2-29]の各碑は、教育草創の当初から戦後の激動期にあって、子供たちの学力向上や様々な課題解決を目指し、ひたすら教育の充実に専心し、保護者・地域住民に篤く敬慕された多くの教育者の一端を示している。特に、[B-2-16, 18, 19, 27]の各碑は、明治初期から、市中心部だけではなく周辺部のそれぞれの地域において、熱意あふれる教育者と彼らを敬慕する住民が一つとなって子供たちの教育を切り拓いてきた様を示している。困難な状況におかれた子どもたちの背景要因にまで踏み込み課題解決に挑戦した教師一人一人の教育実践の積み重ねが、「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」京都市の教育の背骨を形づくっていくこととなった。

Table 3 「明治以降の教育者を顕彰する碑一覧」

<p>【幸野梅嶺生誕地碑 [B-2-12]】</p> <p>1880（明治13）年、田能村直入（1814～1907）らとともに京都府画学校（現京都市立芸術大学、銅駝美術工芸高等学校）を設立した画家・教育者として名高い幸野梅嶺（1814～95）の生誕を記念。西谷淇水らの学校設立の建議文に名を連ねている。</p>
<p>【石崎先生堂射碑 [B-2-13]】</p> <p>三十三間堂の通し矢で日本一と謳われた弓の名手石崎長久（1819～86）を顕彰。維新後は京都府に出仕し、弓道教授に専念した。</p>
<p>【仏人列翁就理氏遺愛碑 [B-2-14]】</p> <p>1872（明治5）年から1875年まで京都府に招かれ仏語学校の教師をつとめた仏人医師レオン・ジュリー（1822～1891）を顕彰。</p>
<p>【ワグネル顕彰碑 [B-2-15]】</p> <p>1878（明治11）年、京都府に招かれ舎密局に着任し、京都の近代化に貢献したドイツの科学者ワグネル（1831～1892）を顕彰。</p>
<p>【中路亭表彰碑 [B-2-16]】</p> <p>洛西・乙訓地域で活躍した教育家、中路亭（1832～90）を顕彰。学制発布により明治5年川島村小学校（現川岡小学校）の校長に就任し、その後、物集女小学校に招聘されるなど地域で敬慕された。</p>
<p>【矢部文載紀恩碑 [B-2-18]】</p> <p>1872（明治5）年創立の東野校（現山階小学校）の初代校長（心得）をつとめ約40年間教壇に立ち、山科の教育の父と呼ばれた矢部文載（1845～1922）を顕彰。</p>
<p>【益井茂平翁顕彰碑 [B-2-19]】</p> <p>眼科医で郡中第4小学校蓮台野校（現楽只小学校）の初代校長をつとめ人権教育に専心した益井茂平（1833～1903）を顕彰。</p>
<p>【嶋村俊一郎邸址碑 [B-2-20]】</p> <p>京都府立医学専門学校（現京都府立医科大学）の初代校長、嶋村俊一郎（1860～1923）の邸宅跡を示す。</p>
<p>【剣聖内藤高治先生顕彰碑 [B-2-21]】</p> <p>1899（明治32）年、京都武徳会本部に招聘され、武徳会剣道師範を約40年間つとめた内藤高治（1862～1929）の功績を顕彰。</p>

<p>【「中川小十郎顕彰碑 [B-2-22]】</p> <p>1900（明治 33）年、私財を投じて京都法政学校を開設するなど立命館学園の基礎を築いた中川小十郎（1866～1944）を顕彰。</p>
<p>【新村出博士旧宅碑 [B-2-24]】</p> <p>終生京都に住まいし、京都帝国大学教授をつとめ、「広辞苑」等の編纂に専念した言語学者・新村出（1876～1967）博士の旧邸を示す。1915（大正 4）年に京都市教育会が建碑事業のため設けた「史蹟調査委員会」の顧問をつとめた。</p>
<p>【真下飛泉「戦友」碑 [B-2-25]】</p> <p>修道、尚徳、成徳尋常小学校の校長等を務めた教育者・真下飛泉（1878～1926）が作曲した軍歌「戦友」を記念。</p>
<p>【本尊美君碑 [B-2-26]】</p> <p>1924（大正 13）年から京都市に住み府立第一中学校の英語教師をつとめたイギリス人の日本研究家・ボンソンビー博士（1878～1937）を顕彰。</p>
<p>【上田静一先生之碑 [B-2-27]】</p> <p>田中尋常小学校（現養正小学校）で人権教育実践に貢献し、市内初の夜間学校を開設した上田静一（1884～1953）を顕彰。</p>
<p>【福井謙一ノーベル化学賞受賞記念碑 [B-2-28]】</p> <p>1981（昭和 58）年我が国で初めてノーベル化学賞を受賞した京都大学工学部・福井謙一教授（1918～1998）を顕彰。</p>
<p>【米田貞一郎先生の満百一歳をお祝いする碑 [B-2-29]】</p> <p>京都市立堀川高等学校長を約 10 年間、京都市教育委員会指導部長をつとめるなど一貫して教育に専心した米田貞一郎（1909～2016）を顕彰。</p>

2-4 世界とつながった生涯学習都市「京都」の姿

A 群、B 群に見られる多様な教育碑の存在は、京都が建都以来今日まで、常に、様々な学習の場や多彩な教育者・指導者など、学びを支える豊かな環境に満ちた都市であり、それらを生かして人と人、世代から世代へとつなぐ生涯学習都市として存在し続けてきた姿を示している。そして、また、京都は時代の節目、節目に、人的な交流も含め、世界とつながった都市であった。前述の「文章院聖堂御跡」碑、「綜芸種智院蹟」碑は、建都の当初から、遣唐使等の人的交流を背景として、大陸文化とつながった平安京の姿を示している。

また、山脇東洋に関わる 2 基の碑 [B-1-05, 06]、関以西の蘭学の祖と言われる蘭方医・小石元俊（1743～1809）の「究理堂跡」碑 [A-1-41]、長崎でオランダ人医師から直接学んだ蘭方医新宮涼庭の「居住地」碑 [A-1-42]、京都に洋学の新風を起こした山本覚馬（1828～92）の「会津藩洋学所跡地」碑 [A-1-47]、市井に西洋科学技術の種を蒔いた「京都舎密局跡」駒札 [B-1-07] は、江戸中期から明治初期にかけて、西欧諸国との交流をととして積極的に蘭学・洋学、医学、兵学が京都に移入されたことを示している。また、「仏人列翁就理（レオン・ジュリー）氏遺愛碑」[B-2-14]、「ワグネル顕彰碑」[B-2-15]、「本尊美（ボンソンビー）君碑」[B-2-26] の各碑は、西欧諸国から招聘された多くの科学者・教育者等が、技術の伝習のみならず人材の育成を通して、京都の近代化に大きな役割を果たした一端を物語っている。

これらの碑は、京都が、様々な時代に諸外国との人的交流をととして大陸文化や西欧文化

とつながり、「全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由に集い、自由な文化交流を行う」という、世界文化自由都市宣言^[38]が目指す都市の姿を、これまでの歴史の歩みの中で希求してきたことを示している。

2-5 子供たち・教職員のかけがえのない「命」を尊ぶ「京都」の姿

C群の各碑は、子どもたちや教職員のかけがえのない命を尊び、天災・事件・事故等による殉難者、殉職者を慰霊・追慕する心に満ちた「京都」の姿を示している。京都市域には、教育関係の殉職・殉難者を合祀するいわゆる「教育塔」^[39]は建立されていないが、個別の慰霊碑は少なくない。特に、京阪神を中心に甚大な被害をもたらした室戸台風の犠牲となった学童や教職員を末永く慰霊し、後世に語り継ぎ教訓化しようとする碑が、市内に8基 [C-01～08] 建立されている。

その一つが、知恩院三門横にある「師弟愛の像・碑」[C-01]である。1934（昭和9）年9月21日、京阪神を襲った室戸台風は各地に未曾有の被害をもたらし、全国で死者・不明3,000人を超えた。当時は木造校舎が普通の時代で、多くの校舎等が倒壊。授業時間中であつたため、多数の児童生徒、教職員が犠牲となる大惨事となった。全国で143校の校舎が倒壊し、2,400人の学童が死傷、京都市内でも13校の校舎が倒壊し、児童112名、教員3名が死亡した。京都市風害誌^[40]には、「最も悲惨を極めたのは学校の被害であつた」と記されている。

その中の1校が、当時の京都市立淳和小学校、現在の西院小学校であり、児童32名が犠牲になった。校舎が倒壊してきた時、松浦寿恵子訓導（1904～34）が、自らの命を賭して子供たちを救った。このことが大きな感動を与え、松浦先生の行動を称え、同時に災害に備える教訓にしようと、市民が浄財を出し合って、師弟愛の像が建てられた。その台座には、松浦先生の行為に感銘を受けた歌人吉井勇（1886～1960）が詠んだ歌、「かく大き 愛のすがたを いまだ見ず この群像に涙しながら」が刻まれている。また、西院小学校の校内には「風災記念碑」[C-02]が建立され、現在も、防災教育の生きた教材としての役割を果たしている。他にも、2名の訓導が殉職した京都市立向島小学校や下鳥羽小学校、元西陣小学校など甚大な被害を被った学校内やその付近に慰霊碑等が建立され、それらの碑は、学校や地域で折にふれ、当時の様子を子供たちや地域の人々に語り継ぐための生きた教材となっている。同様に、京都女子大学には、同大学卒業生で勤務していた大阪府豊津尋常高等小学校において児童3名と共に犠牲となった横山仁和子訓導を慰霊する「師弟愛の像」[C-08]が建立され、大谷本廟内には、横山先生をはじめとする室戸台風による学童・教職員の殉難・殉職者を慰霊する「師弟愛の碑」[C-07]が、「関西風水害罹災学童碑」として建立されている。

また、自然災害以外の事件によって失われた尊い命を慰霊する碑も建立されている。京都市総合教育センターの玄関横に設けられている「命の輝き」碑[C-09]である。1999（平成11）年12月21日、伏見区の小学校の校庭で、放課後、小学校2年生の男児が外部から侵入

した少年に襲われ命を奪われるという痛ましい事件が発生した。遺族の思いは筆舌に尽くせないものと察せられる。京都市の教育関係者すべてが折にふれ慰霊の心を新たにし、二度とそのような痛ましい事件を生じさせないという決意を心に刻むため、教職員の研修センターの玄関横に碑が設置されることとなった。

このほか、本稿が対象とする教育碑以外に、市内には、秀吉（1537?～98）の朝鮮出兵による犠牲者を供養する耳塚修宮供養碑をはじめ、応仁の乱、鳥羽伏見の戦い・戊辰戦争、日清・日露戦争や太平洋戦争、西陣や馬町の空襲等様による殉難者を慰霊する碑も数多い。これらは、単にそうした歴史的事実があったことを記録し、慰霊するだけではなく、そのことを教訓として、一人一人の命、人権を大切にし、未来に生かしていくための生きた教材にすることが重要である。碑としての本質的な姿がそこにあるということができる。

3. 教育碑の活用について

次に、教育碑が、学校教育や生涯学習において、十分活用されているかという観点で見ると、各学校に設置された慰霊碑など一部を除いて、ほとんど活用されていないのが実態である。

理由の第一は、保存碑^[41]、特に、京都市教育会^[42]や京都史蹟会^[43]によって建立された「石柱」形式の碑には、事績名、建立者、建立期日等が刻まれるにとどまっており、市民のみならず教育関係者の興味・関心を引きにくいことである。これらの碑は、現在の管理者が明確ではないため、市民の貴重な財産として十分に活用できるよう、建立趣旨等を記した駒札やキャプションを付すなど、適切な手立てが早急に講ぜられることが望まれる。その際、必要経費のすべてを行政が負担するのではなく、自治会、NPO、ボランティア、各種団体等民間セクターの協力を得て、公・民協働の取組により、保存・活用を図るシステムを構築することが重要である。現在、民間企業と京都市が協力し、京都市歴史資料館作成の「京都のいしぶみデータ・ベース」を基に、スマートフォン用アプリが作成され、既に供用開始されている^[44]。また、京都市では観光 MICE の一環として平成 28 年度から 5 年計画で駒札設置が進められており、これらの事業との連動も望まれるところである。

第二の理由として、学校教育における碑の活用場面としては、社会科や総合的な学習の時間における地域学習等が考えられるが、現時点では、碑がそうした素材として教職員に十分認識されていないこと、また、活用しようとしても教師用の指導資料や児童生徒用のテキストが存在しないことが考えられる。

したがって、今後、教職員、保護者、児童・生徒等の教育碑についての関心を高めるための情報提供や教師用指導資料、児童生徒用テキストの作成が求められる。また、市民が広く活用できるガイドブック等の作成も必要である。今回の研究成果を生かし、そうした教材づくりに取り組むことが今後の課題であると考ええる。

4. おわりに

本研究（本稿及び「総合的考察（一）」）の成果として、第一に、京都市域に所在する教育碑についての初めての实地調査と分析をとおして、その全体状況（対象年代、地理的分布、建立者、建立時期、建立目的等）を明らかにすることができ、第二に、上記を踏まえた各碑及び碑群についての考察の結果、次のような京都の都市特性、教育的風土を浮き彫りにすることができた。

- (1) 平安建都当初からの教育発祥の地であり、以来、様々な学びの場や豊かな人材に満ち、それらを生かして、進取の精神の下、先進的・革新的な取組を創出する営みが世代から世代に受け継がれ、また、世界につながった生涯学習都市としてあり続けてきたこと。
- (2) 初等中等教育、高等教育それぞれにおいて、全国初となる種々の学校・幼稚園等が創設されてきた近代公教育発祥の地であり、その原動力として、地域住民、市民の力が大きな役割を果たしたこと。
- (3) 時代を問わず、常に、開かれた教育を希求し、その実現に向けた営為が積み重ねられ、京都の教育的風土を形作ってきたこと。

一方で、教育碑の保存・活用という点ではまだまだ不十分であり、管理の一層の適正化や活用に向けた方策を検討・実施することが喫緊の課題であり、そのために、公・民協働による保存・活用システムの構築や学校教育・生涯学習で活用できる教材開発が必要であることも明らかとなった。

教育碑のみならず全ての碑は、それ自体が貴重な文化財であり市民の財産であるにもかかわらず、市民や行政の関心はまだまだ低いのが現状である。京都の持つ「伝統と創造」の遺産を世代から世代に伝えるとともに、「歩くまち京都」の進展や一層の観光振興の観点からも、「碑」のより積極的な活用が望まれる。そのためにも、「碑」をテーマとして、京都市歴史資料館や京都市学校歴史博物館、京都学歴彩館を初め様々な公・民の関係機関・団体等による「碑ネットワーク」が構築されることを期待したい。

<注記>

- [1] 本稿においては、現在の地方自治体としての京都市だけではなく、794年の平安建都以来、今日に至るそれぞれの時代における都市・京都を意味するものとして「京都」の用語を用いている。
- [2] 生田義久 2018「京都市域に所在する『教育碑』についての総合的考察（一）」佛教大学教育学部学会紀要第17号 P1-8
- [3] 注 [2] 前掲論文において、原則として、以下の条件に該当する碑を「教育碑」と定義している。(P2)
① 現在の京都市域内に所在するもの。② 何らかの形で「教育」との関りを有するもの。③ 素材は「石」のみに限定しない。④ 建立趣旨等を説明する碑文や副碑の有無は問わない。ただし、道標、墓碑、彫像、胸像、モニュメントのみの対象としない。⑤ 現在は存在しない施設や過去の人物・団体等

に関わるもの。ただし、学校等で建立されることの多い教育理念・校訓、周年記念等に関わるものは除く。

- [4] 「平安時代の高等教育機関で式部省の管轄下にあり、大学頭以下の事務官、博士以下の教官、学生から成り立っていた。最盛期は菅原・大江氏に代表される平安時代前期で、後期には漸次衰退し、治承元（1177）年の大火で焼失した。」とされる。（京都市歴史資料館 情報提供システム・フィールドミュージアム京都「京都のいしぶみデータ・ベース」／「大学寮址碑」）
<http://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/zenkenlist_frame.html> 2016.12.19 アクセス
- [5] 「大学寮の公認寄宿施設。平安時代前期、有力貴族は子弟の教育を奨励するために、次々に大学寮に学ぶ学生の寄宿施設を設けたが、やがてそれが大学別曹となった。大学別曹には、和気氏の弘文院、藤原氏の勸学院、在原氏の奨学院がある。」（平凡社 2007「世界大百科事典」改訂新版）
- [6] 上京第二十七番組小学校は、その後、1873（明治6）年柳池小学校、1943（昭和18）年柳池国民学校と変遷を重ね、1947（昭和22）年5月5日、新学制の下で柳池中学校として開校。2003（平成15）年4月に統合により、現在京都御池中学校。統合跡地には京都御池中学校、保育所、高齢者福祉施設等の複合施設「京都御池創生館」が開設されている。
- [7] 沼津兵学校付属小学校や「日本最初の公立学校」を謳う新潟県小千谷市立小千谷小学校などがあるが、河野武司論文では、「わが国最初の先覚的小学校、近代的小学校の萌芽として上京第二十七番組小学校が落成したのである」（「明治初期における先覚的小学校の一例」兵庫女子短期大学論集5, T79-95.1972-03-10）とされ、「入学資格・設備内容・その他構成概念等の点で沼津兵学校付属小学校をわが国最初の近代的小学校としなかった」との注記がある。
- [8] 「番組とは、明治元年から翌年にかけて町組が再編されたことで誕生した組織である。町組は、天文年間（1532-55）の初めごろに成立した町の連合体であり、自治組織として機能してきた。」（和崎光太郎 2014「京都番組小学校の創設過程」学校歴史博物館年報第15号 P.4）、二度の町組再編を経て番組小学校誕生時には、三条通を境に上京に33、下京に33、合計66の番組が存在していた。
- [9] 京都府は明治元年10月8日に小学校建営について告示を行い、「衆議口論ヲ到採用度」と町衆の意見を聴取し、同年11月20日には、各番組町年寄と議事者を集めて、小学校設立についての口論を行った。（注[8] 前掲書 P.8、京都市教育 1222 年の軌跡編集委員会 2016「京都市教育 1222 年の軌跡」P.6）
- [10] 竈金（竈別出金）とは、小学校の運営費を継続的に確保するため、子どものあるなし、借家家持の区別なく、すべての家から負担の少ない額を平等に資金を集めるために設けられた制度である。半年に一分、一年で二分、竈戸集と称して集められた。（京都市学校歴史博物館・京都市教育委員会 2006「京都学校物語」京都通信社 P.53-54）
- [11] 注[8] 前掲書 P.8
- [12] 注[8] 前掲書 P.9
- [13] 「京都市における小学校は、「番組小学校」のみではない。1872（明治5）年の学制発布直後においても数多くの「郡中小学校」が相次いで開校した。」（古川晴之他「廃仏毀釈と郡中小学校」日本建築学会計画系論文集第610号 2006年12月 P.153）
- [14] 京都市においては、1985（昭和60）年頃から、保護者・地域住民等による教育的見地に立った議論を尊重する京都方式と呼ばれる手法で学校統合が進められ、2017年4月時点で、79校の学校・幼稚園を20校の学校・幼稚園に統合する大都市では例のない大規模な統合が進展している。
- [15] 初音中学校は、1869（明治2）年上京第二十六番組小学校として開校、1875（明治8）年初音小学校、1887（明治20）年初音尋常小学校、1943（昭和18）年初音国民学校と変遷を重ね、1947（昭和22）年5月5日、新学制の下で初音中学校として開校。1993（平成5）年4月に柳池（現京都御池）中学校に統合。統合跡地には京都市教育相談総合センター、不登校の子供たちのための京都市立洛風中

学校、京都市万華鏡ミュージアム、初音の杜等が整備され、子どもたちや市民の心の居場所、憩いの場となっている。

- [16] 「新英女学校及女紅場」は、明治5年に同志社大学の創始にも関わった山本覚馬により設立され、当初英学校及び女紅場の二科が設けられた。我が国初の女学校と言われる。明治期の女子教育の場としての女紅場には、そのほか、番組が中心となって開設し実用教育を行う市中女紅場、遊所の芸妓の職業指導所としての遊所女紅場があった。「島原歌舞練場跡碑」[A-2-48]の島原歌舞練場の前身は「島原女紅場」である。(注[4] 前掲 HP「女紅場址碑説明」、松田有紀子 2010『『花街らしさ』の基盤としての土地所有』Core Ethics Vol.6 P.404)
- [17] 元待賢小学校訓導・古川太四郎(1845～1907)は、1875(明治8)年、上京第十九区(待賢)校の校内に我が国初の瘡唾教場を開設。1878(明治11)年5月に移転し、旧生糸改会所を仮校舎として我が国初の「盲唾院」を開設、翌年京都府の所管となり、我が国初の公立盲唾院となる。(注[9]「京都市教育1222年の軌跡」P.8-9)
- [18] 日本初の幼稚園は一般に、1876(明治9)年創立の東京女子師範学校付属幼稚園(現在の「お茶の水女子大学附属幼稚園」)と言われるが、1875(明治8)年に、上京第三十区第二十七番組小学校に付設された「幼稚遊嬉場」が実質的に日本初の幼稚園であった。(京都府教育会 1940「京都府教育史・上」P.447)
- [19] 注[10] 前掲書 P.72-75
- [20] 六大巡幸とは、1872(明治5)年の大阪・中国・西国、1876(明治9)年の奥羽・函館、1878(明治11)年の北陸・東海道、1880(明治13)年の山梨・三重・京都、1881(明治14)年の山形・秋田・北海道、1885(明治18)年の山口・広島・岡山とされる。(小坂肇 1998「太政官期地方巡幸の基礎的研究」法政史学 P.63)
- [21] 京都府立医科大学百年史編集委員会 1974「京都府立医科大学百年史」P.23-24
- [22] 上横手雅敬 1988 三高同窓会「三高同窓会報」第 67 号
- [23] 綜芸種智院式并序刊行委員会 2002「綜芸種智院式并序」(空海) P.34
- [24] 種智院大学「建学の精神・沿革」<<http://www.shuchiin.ac.jp/about/history.html>>2017.04.20 アクセス
- [25] 劉琪「江戸時代の私塾 2000 年版 於二京都・学文所取立申度趣意書」
<<http://liuqi2000.tripod.com/page20.html>> 2017.04.20 アクセス
- [26] 有斐斎弘道館「有斐斎弘道館とは」<<http://kodo-kan.com/aboutus/>> 2017.04.20 アクセス
- [27] 注[10] 前掲書 P.90-93
- [28] 注[8] 前掲書 P.256-257
- [29] 衣笠安喜 1983「京都府の教育史」思文閣出版 P.336-360
- [30] 注[10] 前掲書 P.27
- [31] 注[10] 前掲書 P.27, 29-30
- [32] 手島堵庵は、1765(明和2)年には富小路通三条下るに、最初の心学講舎である五楽舎を設立し、さらに、1773(安永2)年、五条通東洞院東入に脩正舎を、1779(安永8)年、今出川通千本東入に時習舎を、1782(天明2)年、河原町通三条に明倫舎をそれぞれ開設した。これらの講舎は、その後組織化していく心学教化活動の中心的存在となっていった。(注[4] 前掲 HP「石門心学」手島堵庵)
<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/sheetlist_frame.html> 2017.04.20 アクセス
- [33] 注[10] 前掲書 P.9
- [34] 注[10] 前掲書 P.30
- [35] 河原町通三条に開設された明倫舎は、天明の大火により焼失。後に錦小路室町上るの地に再建され、京都のみならず全国の心学教化活動の拠点になっていった。その後、1869(明治2)年に土地・建物

が下京第三番組小学校（のちの明倫小学校）に転用され、明倫舎は新町二条上るに移った。明治5年に下京第三区小学校、明治8年に明倫小学校となり、学校統合を経て現在は若い芸術家を支援する施設である京都芸術センターとなっている。（注 [21] 前掲書 P30、注 [5] 前掲 HP「石門心学」明倫舎跡）

<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/sheetlist_frame.html> 2016.05.16 アクセス

[36] 注 [10] 前掲書 P9

[37] 「過去に存在した施設、人物・団体等の存在や意義・功績等を同時代や後世の人々に広く伝播していくことに主眼」をおいた碑（注 [2] 前掲論文 P6）

[38] 「都市は、理想を必要とする。その理想が世界の現状の正しい認識と自己の伝統の深い省察の上に立ち、市民がその実現に努力するならば、その都市は世界史に大きな役割を果たすであろう。われわれは、ここにわが京都を世界文化自由都市と宣言する。世界文化自由都市とは、全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流を行う都市をいうのである。（以下略）」（京都市「世界文化自由都市宣言」 ページ番号 35716）

<<http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000035716.html>> 2017.08.17 アクセス

[39] 教育塔は教育に関する殉職者、殉難者の慰霊、合祀するために建立されるもので、大阪市、千葉県、岡山県等にその例がある。

[40] 京都市役所 1935 年「京都市風害誌 昭和 9 年 9 月 21 日」P18

[41] 「過去に存在した施設等の名称や位置を保存・表示することに主眼」をおいた碑（注 [2] 前掲論文 P6）

[42] 「教育会は、1880 年代以降、全国的に教員の研究組織として設置され、京都市では、1898（明治 31）年の市制特例撤廃後、1902（明治 35）年 2 月 8 日に、既設の京都府教育会とは全く別の新たな組織として」発足した。（注 [2] 前掲論文 P3）

[43] 「京都に関する史実を調査し、社会に貢献した事績や事物を顕彰することを目的とする歴史研究団体で、1913（大正 2）年 2 月、京都の呉服商「千吉」の 11 代目当主 西村吉右衛門（1884～1944）によって設立された。その後、財団法人化され戦後も活動は継続し、最終的に 1997（平成 9）年 10 月に解散」している。（注 [2] 前掲論文 P4）

[44] 「いしぶみガイド—京都 1200 年をたどる旅」エイジシステム株式会社

<<https://play.google.com/store/apps/details?id=com.agesystem.ishibumi&hl=ja>> 2017.08.19 アクセス

<参考文献>

- ・京都市教育会 1932「京都市教育會沿革略」
- ・京都市学校歴史博物館・京都市教育委員会 2006「京都学校物語」京都通信社
- ・京都市学校歴史博物館 2014「京都市学校歴史博物館紀要」第 3 号
- ・京都市教育 1222 年の軌跡編集委員会 2016「京都市教育 1222 年の軌跡」
- ・京都市教育委員会事務局調査課 1956「京都市立学校沿革」
- ・京都報道センター 1981「明治・大正・昭和 京都市立学校沿革史」
- ・京都府教育会 1940「京都府教育史・上」
- ・衣笠安喜 1983「京都府の教育史」思文閣
- ・海原徹 1996「日本史小百科 学校」東京堂出版

（いくた よしひさ 教育学部）

2017 年 11 月 20 日受理